

## 近代日本文学研究上の課題と第三項論の意義に関する私論（二）

——〈他者認識〉と〈世界像の転換〉をめぐって——

山 中 正 樹

### 要 旨

明治維新以後西欧から移入された、所謂〈近代的自我〉を描出することが、日本の近代小説の主題であるとされてきた。しかし、その〈近代的自我〉とはいったいどこに在るのか。従来の議論（とりあえずテクスト論の登場以前）では、それを自明の存在として私たちの外部に位置付け、それを日本の〈近代小説〉がいかに探求し、どのように描き出しているのかを説明することに主眼が置かれていたように思われる。

しかし前稿で確認したように、〈近代的自我〉あるいはそれと対を成す〈他者〉の概念及び〈他者認識〉さえも、田中実氏という〈客体そのもの〉が、私たちの意識に映じた〈客体（そのもの）の影〉なのである。このことを基盤

にしつつ、近代小説を読んでいく時に、今までの研究では見逃されていた、新たな〈他者〉認識と〈世界像〉の転換が齎されるはずである。本稿では、第三項という概念を基底に、日本の近代小説が追及した「リアリズム」の問題を検証していくための基本的立場について考えてみたいと思う。

キーワード・リアリズム・〈近代的自我〉・〈他者〉・

第三項（論）・世界像・認識

一 〈日本近代文学〉における〈他者〉および〈他者認識〉の問題

水田宗子は、近代文学に描かれる女性像について、フェ

ミニズムの問題系から次のように批判している。

文学と女性の想像力』一九九三年十二月 田畑書店

近代文学は、男と女が〈他者〉として互いの前に立ちふさがる光景を、その文学的空間の原像としている。しかし、その原像には、細部にわたる複雑な構図や濃淡さまざまの色彩などが塗り重ねられていて、原画がそのままむき出しにされることはめつたにない。

とりわけ近代の男性作家の作品では、この重ね塗りが色濃く行われ、「中略」男と女の原像的光景をありありと描き出す道だけは回避しようとしてきた跡が歴然と見てとれる。「中略」

男と言う支配的な他者にその自我を封じ込められる中で、冷徹な観察者として鍛え上げてきた女性のリアリズムの目には、近代の男性文学を特徴づけるこのような女への幻想と女からの逃避による救済図絵は、「中略」ながい歴史の時間にわたって描かれつづけ、蓄積された、〈女という夢〉の分厚い文化のテキストに、女性もまたその内面を呪縛され、みずからを表現しようとした女たちもまた、そのテキストの中心に据えられた〈女というメタフォア〉に頼ってみずからの内面風景を描いてきたのである。

〔他者の発見と回避〕『物語と反物語の風景』

男性の描き出した〈幻の女性像〉に呪縛されて、みずからの内面を、男性作家の描く女性像通りになぞってしまふ女性の表現者の姿。それは、あたかもラカンがフロイトの「エディプス・コンプレックス」において指摘した、ないはずの陰莖を切除される恐怖に怯える「女の子」の姿を彷彿とさせるものではないだろうか。図式的な見方をすれば、そこに日本の近代社会と近代文学における、男性中心的な家父長制による、女性と女性心理の抑圧を見出すこともできるともいえるだろう。

続けて水田は、川端文学に描かれる女性について次のように述べている。

『雪国』（一九三五〜四七年）や『山の音』（一九四九〜五四年）、『千羽鶴』（一九四九〜五一年）など、川端康成の小説の男たちもまた、セクシュアリティをのみ備えた理想の〈女〉を求めて、家庭の外へと放浪するのだが、その〈女〉は家庭の中だけでなく、すでにこの世にはいない、失われた夢の中の〈女〉である。〈女〉を求めるとき、彼らは自分の内面風景を夢みている。

無垢な処女であり、母である、これらの夢の女がいなければ、彼らに自分たちの内面は見えてこない。〈女〉を求めるこれらの小説は、あくまでも男の内面劇なのである。彼らはセクシュアリティとして顕現してくるはずの〈女〉の本質が、ひとりの女に体现されることを夢想するが、その夢が成就されることはほとんどない。〔女への逃走と女からの逃走〕 水田前掲書所収)

川端文学に描かれる女性もある意味では、「理想の〈女〉」としてカテゴリライズされた女であり、作中の男性主人公がそれを希求するというパターンは、川端文学においても容易に見てとることができるだろう。そしてその〈女〉たちは水田の指摘どおり、現実の世界には存在していないだろう。

ただ、水田の指摘からは、(男性と女性の関係の問題の当否についてはひとまず置いて)本稿で問題とする(他者)と(他者認識)の問題や、「リアリズム」の在り様をめぐる、典型的・伝統的な捉え方を見てとることができる。水田は、実在としての「男性」「女性」および、外側から観察可能な両者の関係性を問題にしている。もっともそれは、フェミニストとしての水田の問題意識からは当然のことであり、それを単純に批判するつもりはない。水田にとっては、現

実の、生身の〈女〉を見る〈男〉たちの眼差しや認識が問題なのであり、外界あるいは世界全般の認識の在り様を問題にしているわけではない。

一方、そのような女を描き出す川端のテキスト空間、あるいは川端文学における世界像について、柄谷行人は次のように述べている。

ノーベル文学賞を受けた川端康成の『雪国』は、「国境のトンネルを抜けると雪国であった」ではじまる。主人公にとって、トンネルの向こうは別世界である。〔中略〕彼が温泉の芸者たちとの愛の関係に苦悩したとしても、彼はそこで傷つくことはない。傷ついた女たちを冷徹にながめる主人公の自意識は揺るぎもしない。なぜなら別の(他の)世界であるにもかかわらず、彼はなんと「他者」に出会っていないからである。しかも川端がそのことをはっきりと自覚していることは、頻繁に用いられる「鏡」のイメージからも明らかである。つまり、主人公にとって、女たちは鏡に映った像においてあるだけなのだ。女たちが現実にごうであるうと彼は鏡に、いかえれば自己意識に映った像以外になんらの関心ももたない。

『雪国』とは、他者にけっして出会わないようにす

るために作り出された「他の世界」である。ここでは歴史的文脈さえ消されている。

〔歴史と他者——武田泰淳』『終焉をめぐる』  
一九九〇年五月 福武書店〕

一般的な〈読み〉のレベルでは柄谷の指摘するように、川端の小説に登場する女性たちは、現実とは離れた別世界に住んでいると言っておいてよいだろう。ただしこの柄谷の発言には、〈近代小説〉をめぐる重要な問題が含まれている。それは柄谷の言う「他者」の概念定義、あるいは「他者」に出会っていない」ということがいかなることなのか、ということであり、それは〈近代小説〉成立の根幹にもかかわる重要な問題でもある。

柄谷は〈他者〉をどのようなものとして定義しているのか。単に〈自己〉以外の存在、あるいは〈自己の外側に存在するもの〉という意味なのか。はたまた〈未知の存在〉という意味合いなのだろうか。いずれにせよ「他者」の内実は詳述されていない。さらに引用部分後段の、「雪国」とは、他者にけっして出会わないようにするために作り出された「他の世界」である。ここでは歴史的文脈さえ消されている」という言辞においても、「雪国」の物語空間が、どのように〈他者〉を排除しているのかという仕組みにつ

いての具体的な説明を欠いている。

前稿（本誌第二十五号 二〇一五年三月）でもみたように、田中実氏はこれまで日本で〈近代小説〉として位置づけられてきたものを、〈近代の物語〉と定義し直している。この〈近代の物語〉に対し、田中氏の言う〈近代小説〉は「物語+〈語り手の自己表出〉と定義される。更に田中氏は、「近代小説」は三人称客観描写を雛形にしています。これを達成するためには、〈わたしのなかの他者〉と峻別された了解不能の《他者》、〈向こう〉の領域が要請されています」（都留最期の日のために——これからの文学研究・文学教育——）「国文学論考」第四十八号 二〇一二年三月）と述べ、単に「自己」以外のものを「他者」とする考え方を退けている。

前にも述べたように田中氏の第三項論は、〈近代的自我〉を実在するものとして捉え、それを描くことが〈リアリズム〉であるとしてきた〈日本近代文学〉を相対化するものである。右に見た柄谷の発言は、田中氏の言う〈リアリズム〉を基盤として発せられており、その基底には日本の近代文学が描こうとし続けてきた〈近代的自我〉が存在することは明らかである。〈近代的自我〉と対置されるものという認識を基盤とするからこそ柄谷の言う「他者」は、概念定義を必要としないのであり、その意味では、川端文

学の主人公たちは「他者にけっして出会わない」ことになる。柄谷の認識モデルは、決してひとり柄谷だけの持っているものではない。ほとんどの批評家あるいは近代文学研究者だけでなく、ひろく一般の読者もこれと同じ認識をしていることだろう。

柄谷は右に見たように、「雪国」が「他者」にけっして出会わないようにするために作り出された「他の世界」である」としたのであるが、別の文章ではそれに加え、「日本浪漫派がまだ彼等が払拭しようとした『他者』・西洋や『現実』に逆接的にとらわれていたのに対して、川端はそれを一切括弧にいれてしまう装置を発見したからである。「雪国」とは、そのような装置である。それはいつさい現実を見ないこと、「鏡」のなかに映った像のみを愛でることである。かくてどんな戦争イデオロギーとも無縁で、滅びゆく「美しい日本の像」のみが定着される」(『近代日本の批評 昭和篇 上』平成三年十二月 ベネッセコーポレーション)とし、日本の伝統的な美を定着させるための川端の独特な認識の在り様を問題にしている。

これに対して田中実氏は、そのように「雪国」を捉える柄谷の世界観に疑問を投げかけ、その解釈に疑義を示して次のように論難する。

柄谷行人氏は川端文学を「他者消去の装置」と呼び、『雪国』を「いつさい現実を見ないこと、『鏡』のなかに映った像のみを愛でることである。かくて、どんな戦争イデオロギーとも無縁で、滅びゆく『美しい日本の像のみが定着される。』と指摘する。

〔中略〕

ここには〈ことばの仕組〉に向かおうとしない読み手の基本的な誤謬があると私は考えている。この小説では『鏡』のなかに映った像のみを愛でる」島村が最初から生きていたわけではなかった。主人公の島村は昭和初年代から十年代「實際運動」に関わっていた。島村は闘う青年だったのである。敗戦のことはなにも書かれていないが、敗戦をはさんで、かつて社会体制との闘争に挫折し、中年となった男の内なる「がらんど」が今すべてを空無と捉えるような感性から抜けられずにいる現実が語られていたのである。『雪国』には歴史が消えているのでも歴史的な脈がないのでもない。『雪国』は戦時下の社会体制と激しく対峙した経験を持つ主人公の感性が、日本の最も優れた伝統文学(ここでは芭蕉)に連なり、宇宙(悠久)と一体化している姿を描き出している。ここにこそ戦争へ向かうイデオロギーを含めて無化させる表現の自立した世

界、川端文学の真髄がある、と私は思うのである。

(田中 実「戦争と川端文学 ——川端康成『ざくろ』」『国語通信』夏号 平成三年六月 筑摩書房 後『小説の力 新しい作品論のために』平成八年二月 大修館書店)

田中氏のこの所説には、川端本人では意識し得なかった(あるいは意識していても語ることが許されなかった)、「川端文学」の戦争への〈加担〉という深刻な問題が横たわっている。川端自身、あるいは同時代や旧来の川端の〈読者〉なら、「川端は戦争と距離を置いていた」と楽観的に語ることができたかもしれない。しかし現代の「私たち」には、そうした無責任な態度は許されるはずがない。

田中氏の指摘はとりあえず、「ざくろ」(昭和十八年五月)における〈戦争〉や〈天皇制〉をめぐる言説の言言のだが、柄谷が扱って立つところの実体論的世界認識への批判としても有用である。柄谷の発言は、自己と他者、あるいは世界と自己の関係を、どこまでも実体的なものとして捉え、それを現実のレベルにおいて「一切括弧にいれてしまいう装置」と位置づけている。これは実体論的な立場から発するものであることは言うまでもないことだろう。

前稿でもみた田中氏の第三項論から捉えれば、柄谷の認

識はどこまでいっても、近代文学における「リアリズム」の伝統の枠から出るものではなかったものであり、世界観認識において決定的な過ちを犯したままのものであると言えないのではないか。そこで次に、田中氏の所説を紹介しながら、日本の「近代小説」における〈他者〉(もしくは〈他者性〉)の問題について考察してみよう

## 二 〈日本近代文学〉における「リアリズム」と実体論的世界観をめぐる誤謬

右でも触れたように、田中氏は〈近代の物語〉と〈近代小説〉を峻別する。しかし日本の近代文学研究史では、それらが区別されてこなかった。そうした現状が齎す問題点について、田中氏は次のように指摘している。

これまでの伝統的物語文学に、〈超越〉という異国の《神》を隠し持った「小説」が侵入し、「日本近代小説」という新しいジャンルが日本に登場します。三人称客観と言う形式に端的に現れる、捉えている客体の〈向こう〉は、了解不能の《他者》に対峙するそれ自体通常人間業を超える形式でした。それを読者共同体のほうは「近代小説」を「近代の物語」と峻別しないまま

受容して来ました。客体の文章を自立した客体の出来事と捉え、物語内容を読めばことたりていたのです。

〔〈原文〉と〈語り〉再考 村上春樹『神の子どもたちはみな踊る』の深層批評〕「国文学解釈と鑑賞」平成二三年七月 ゴチツクは原文のまま。以下同じ）

さらに田中氏は、そうした「近代小説」を（読む）行為の本質を、次のように説明する。

作中に固有名詞の人物なり、三人称の「彼」なりが登場すると、その「彼」は語られて現れる働きであり、「彼」とは作中の実体 $\parallel$ 生身でありながら、〈語り〉語られる $\parallel$ 相関の機能として読み手に表れ、「読むこと」それ自体が関係のメカニズムのなかにあり、それが読み手のフィルターを通して一回性として現れるのである、それが「近代小説」と言う対象「作品」なのです。そうすると、「近代小説」の読書空間は読書主体とその捉えた客体の領域と客体そのものの三項に峻別されます。

人に捉えられた客体は客体そのものではなく、その人のフィルター（感受性や体験）で捉えた、ある種の

屈折を通したものですから、客体そのものは永遠に捉えられません。しかし、その客体そのものがなければ自分自身のとらえた客体もないのですから、言わば対象の客体の〈本体〉ではなく、〈影〉にあたるものを我々読者は捉える、これが基本、「読むこと」の出発点です。

〔同「原文」と〈語り〉再考 村上春樹『神の子どもたちはみな踊る』の深層批評〕 傍点は原文のまま）

このような田中氏の理論の背景には、ソシユールによる〈言語論的展開〉を経たポストモダン以降の、〈読みのアナキー〉や、バルトの〈還元不可能な複数性〉によつて齎された〈文学〉の終焉から、如何に〈文学〉を救い出すのかという切実な問題設定があると言つてよいだろう。いったいつから〈文学〉を〈読み／語る〉ことが、これほど気恥ずかしく不毛なものと言われるようになったのだろう。そうした自己閉塞的な状況を脱するためにはどうしたらいいのか。このことに関して田中氏は、次のように述べている。

近代小説とは極点から折り返し、世界を新たに見せる装置なのです。小説というジャンルは物語と詩からなり、〈語り手の自己表出〉とともにあるのです。〔中

略) 物語があつて(語り)があるのでは全くありません。語りが記憶(物語)を想起させて叙述が行われているのです。そのため、全ての小説の言語空間は(語り、語られる)現象としてしか生身の読み手の前にはなく、これが生かされる「読み方」が「読むことの背理」と闘う(自己倒壊)であるとわたくしは捉えています。

(「読みの背理」を解く三つの鍵 テクスト、(原文)の影・(自己倒壊)そして(語り手の自己表出)」「国文学 解釈と鑑賞」平成二〇年七月)

先に述べた柄谷らの問題点は、田中氏の言う「近代小説」と「近代の物語」を区別しないために生じていたのである。その後柄谷は、近代文学に絶望し、文学は終焉したとして文芸批評を放棄する旨を表明している。しかし柄谷自身の問題点もふくめ、日本の近代文学(研究)が陥ってきた陥穽について田中氏は、次のように明らかにしている。

「三人称客観」が与えるリアリズムの価値が近代小説の画期的意義でありながら、同時にこのリアリズムの提出とその超克とを併せ持っていたことが近代小説を小説たらしめていた。近代小説がその誕生の時から

ポストモダンを抱えた「世界視線の帰属点」をより否定したところで成立していたのである。柄谷の説く危機や終焉説は根本的な誤謬を含んではいなかったか。

(「小説は何故(Why)」に応答する―日本近代文学研究復権の試み―) 松澤和宏・田中実 編著『これからの文学研究と思想の地平』二〇〇七年七月 右文書院)

田中氏が何度も強調してきたように、日本の近代文学研究においては、(他者)や(世界)は、私たちの外側に、実体として存在するものと捉えてきた。そのことが、柄谷はじめ多くの研究者の誤りの源泉である。前稿あるいはこれまで様々な場所で述べてきたように、田中実氏の第三項論から日本の近代小説を読み直した時に、それらとは全く異なる世界像が展開されるのである。

### 三 反(リアリズム)の文学世界 ――「第三項と〈世界像の転換〉」のために――

くどいようだが、柄谷たちの言う「近代小説」は、その存在価値を(リアリズム)に置いているが、先に挙げた「雪国」をはじめとする川端康成の小説世界は必ずしもそうで



はない。

新感覚派時代の小説はいうまでもないが、(心霊学)の影響をうけ超常的な現象を描いたと言われる昭和初期の段階においても、また非現実的な空間を描き、その中で起こる反社会的・非倫理的なドラマにより、所謂「魔界」と言われる世界を描出した戦後の小説世界においても、川端文学における反(リアリズム)の姿勢は一貫していた。自分を取り巻く現実を超えたものを如何にして捉え、それをどのように表現していくのか。川端の文体上の腐心はそこにあったのであり、それが(新感覚派)的な文体をはじめとする、さまざまな実験的表現に込められた真の意味だったのである。

本来は認識不可能なはずの外界を切り取り、言葉によって描写しなければならぬ矛盾した運命を背負う、作家という立場において、田中氏が言う「語り、語られる」現象」の営為と、それによって作り出される「近代小説」の世界像をどこまでも深く追求したひとりの作家として、川端康成も位置づけられることは間違いない。それを皮相なりリズムの眼で捉えようとすると、「危機」も限界も見えてくれるのだろうか、それははなはだしい誤解といわざるを得ない。

川端が抱いていた言語観については、先に本誌「二十二

号」(二〇一二年三月)でも触れたのだが(拙稿「川端康成における言語の到達不可能性について——川端康成の言語観(三)——」)、その核心は「言語の到達不可能性」をめぐるものである。繰り返しを避けるために、ここでは川端が言語や表現に触れた言説の中から、ひとつだけを挙げておこう。

現実と云ふものに就ても、言葉と云ふものに就て右に述べたと同じやうなことが云へる。現実の形を、現実の限界を、安易に信頼し過ぎてゐる人から深い芸術は生れない。人間は現実界に生活するものであり、一歩進んで、人生とは現実界であると云ふ考へ方は、なかなか動かし難い現実主義の芸術を形造るが、精神の低迷を招きがちな危険がある。事実また、少しく凝視すれば、現実と云ふものは底抜である。現実をより鋭く捉へる精神程、現実の相に就てより多くの懐疑に陥る。

〔表現に就て〕 初出「文芸時代」大正十五年三月号 『川端康成全集 第三十二卷』昭和五十七年七月 新潮社)

川端は、世界を「底抜」と認識していたのであり、言語

だけではなく、いかなる認識や感覚によっても、世界の実像に到達することは不可能であると考えていたと思われる。それは、川端のさまざまな言説から窺えるところである。

これはいままで見てきた、日本の近代文学における伝統的な実体的世界観とは正反対のものであり、田中氏のいう第三項論の考え方と認識を共有するものであることは、論を俟たない。

田中氏は第三項にかかわる議論の際、村上春樹の小説を例として挙げることが多々あるが、川端康成の小説世界もこれらと共通する世界観を持っている。そこには〈近代小説〉というジャンルがもつ、始源的・根源的特徴がみられるのであるが、そのことを田中氏は次のように説明している。

村上春樹は『風の歌を聴け』では宇宙のかなたから吹く「風」、後に「同時存在」、さらに「パラレルワールド」と呼ばれる問題と向き合っていたのですが、それは〈近代小説〉と言うジャンル、三人称客観という文学形式がこれを要求していました。もともとこれは知覚の領域では捉えられないし、リアリズムでは成立しない、仕組みであり、〈言語以前〉の〈向こう〉、永劫の「沈黙」の世界からこちらに〈折り返し〉て現

世を捉える試みに踏み込んでいたのです。

〔『舞姫』の恐るべき先駆性 ―近代文学研究状況批判／〈語り手〉の語らない自己表出―〕清田文武編『森鷗外『舞姫』を読む』二〇一三年四月 勉誠出版)

田中氏は、私たちを取り巻く世界を、「〈言語以前〉の〈向こう〉」（あるいは「感覚以前」）と位置付ける。それは「了解不能」であり、私たちの認識の及ばないところであり、本来は、言語では表現できないところであるとする。それを考えるための仮設概念が「第三項」である。繰返すことになるが、これは世界を、〈主対〉と〈客体〉の二つで捉え、それぞれを実体として認識しようとするものではない。世界を主客二元論で捉えようとする、「不可知論」か「懷疑論」の無限ループに陥ってしまう。そこから脱して、自己と世界の関係をどうとらえていくのか。世界の在り様をどう見定めていくのか。いままで種々論じてきたが、近代的な科学観の限界を超えていくためには、この第三項（論）が必要だと論者は考えるのである。田中氏は次のように述べている。

近代社会になると、「ありのまま」に世界を捉えよ

うとしましたが、同時にそれを相対化し、「ありのまま」とは人が知覚し、意識された世界でしかないことを知ります。それはまた無意識領域が存在することを知らしめます。この言語化を許さない領域と葛藤しながら、目指すべきことは主客相関の世界像のメタレベルでの永劫の沈黙、了解不能の《他者》と向き合うことです。そのためには、捉えた世界像それ自体が底抜けの領域で成立していたことを引き受けなければなりません。

「世界像の転換、〈近代小説〉を読むために——  
続々〈主体〉の構築——」『日本文学』二〇一四年八月号

第三項を前提とした世界認識や読書行為が齎す「了解不能の《他者》」との対峙によって、〈近代小説〉の意味も正しく捉えられるのであり、そのことが私たちの「宿命の創造」や「主体」の（再）構築を可能にすると田中氏は訴える。そのために、いま、〈世界像の転換〉が求められているのである。「〈主体〉の構築」を実践していくには「世界像の転換」を必須とするのです。相対主義の闇、ここから退却し、撤退するのではなく、これを潜り抜け、（いのち）の意味を抉り出すことを願います（「現実は言葉で出来ている——『金閣寺』と『美神』の深層批評——」「都留文科大

学大学院紀要」第十九集 二〇一五年三月）と田中氏はいう。第三項を措定して主客二元論の「リアリズム」的世界観を脱し、「了解不能の《他者》」と向き合うこと。そこからすべてが始まるのだ。

〔付記〕

田中実氏は現在、日本文学協会国語教育部会の活動を機軸としながら、この第三項（論）を基盤とした小説の（読み）と文学（国語）教育の問題について、多くの提言と実践をみせてくれている。現今の中心的課題は「第三項と〈世界像の転換〉」である。

これについては右「日本文学」二〇一四年八月号掲載の「世界像の転換、〈近代小説〉を読むために——続々〈主体〉の構築——」や、「神々の闘い」の時代に、鷗外の『寒山拾得』を読む」（『日本文学』二〇一五年八月）をはじめとする田中氏の論考を参照されたい。とくに本文中でも紹介した「現実は言葉で出来ている——『金閣寺』と『美神』の深層批評——」は、近代文学研究のみならず、現代に生きる私たちに認識の転換を迫る重要な問題を包含している必読の論文である。是非ご一読いただきたい。

（やまなか・まさき、本学教授）